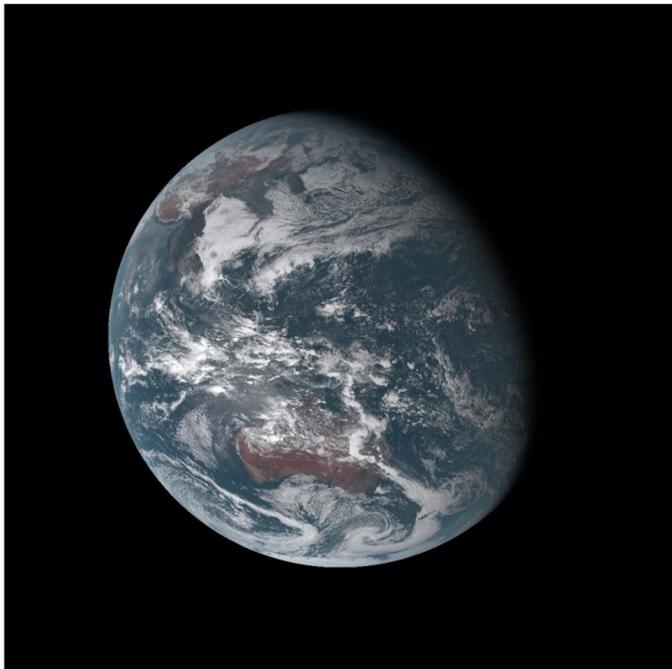


「太陽系を撮る(3)」～地球～

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

木星や土星は、望遠鏡があれば地球から容易に形がわかるし、撮影もできる。しかし、地球の全体像だけは、地球に居ては観ることができない。銀河系の真の姿を、我々は想像するしかないのと同じである。

「現在の地球の姿」を最も手軽に、確実に観察する方法は、気象衛星の画像を見ることだ。気象庁のホームページでは、気象衛星から撮影した地球の姿を、ほぼリアルタイムに観察できる(30分に1回更新)。気象衛星は、常に高度約36000kmの静止軌道にある。これは、地球の直径の約2.5倍の位置なので、地球全体を完全に見ることができるのだ。



「2017年1月14日の地球」気象庁のHPより
日本付近にすじ状の雪雲がたくさん見られる。

衛星画像には、「赤外線」「水蒸気像」などがある。雲画像としては、夜の側も鮮明に写る「赤外線」がわかりやすい。しかし、鑑賞として美しいのは、「全球可視光像」である。これが、宇宙空間から見た地球の真の姿に一番近く、深宇宙に浮かぶ青い惑星を実感できると思う。可視光なので、当然夜の部分は欠けて見える。時間帯によって、月の満ち欠けのように形を変えてゆく様子も面白い。

地球という惑星の大きな特徴は、透明な大気を持つということである。大気が透明だったおかげで、地球

人は、地球の外の状態を観察できるのだ。金星のように不透明な大気だったら、地球人は永遠に宇宙の姿を知らず、天文学も発達しなかつたらろう。月が美しく見えるのも、大気が透明だったからである。



オーロラも美しい。大気と地場があればオーロラは出現する。木星でも観測されているが、木星の不透明な大気では、地表からは見えない。そもそも木星には「立つことのできる地面」がない。



「オーロラを観る」スウェーデン・ポルユス駅

「地球の風景」を撮影したくてハンガリーに行った。魚眼レンズで撮影したら、地球っぽく写った。



「地球と自分の影」ハンガリー・テシュ村